校長ニューズレター（第15号・6月号） 宜野湾市立長田小学校校長：横山芳春

「考えよ！」（著者：イビチャ・オシム）を読んで考えたこと

外国人が日本人を見る目は、私たち自身が自らを見るときよりも客観性を一般的持ち得ている。その外国人が、確かな業績を残した人物であれば、なおさらのことである。

このような意味で、イビチャ・オシム（全日本サッカー前監督）は、日本人を見る目には優れたものがある。

彼は言う、

「日本の子供たちは想像力や独立心を伸ばすための自由をほとんど持っていないように感じる。子供たちは、先生やコーチによって常にコントロールされている。子供たちは、何かやらなければいけないとき、もしくは何かをしようとするときに、必ず先生やコーチに質問をしている。
選手が、『監督、僕は何をすればいいですか？』と、試合が始まっているのに数分ごとに聞いているのと同じことだ。」

本校が全学をあげて取り組んでいる「総合表現」のことをすぐに思い浮かべた。
これまで（他校での経験を含めて）６年間、総合表現に取り組んできて、子どもに何が育つのかと聞かれれば、即座に「自信（これは独立心の本になる）」だと答えることができる。

子どもが自信を持つということは、とても大切なことで、「生きる力」となり、学力を伸ばしていく根っこにもなる。自分に自信があれば（自分はできるんだという自信があれば）、学力は伸びていきます。

野村克也氏は、インタビューに答えて、「教育とは子どもに自信をつけてやることだ。これは、プロ野球の監督の仕事でもある・・・」と発言している。

本校で取り組んでいる、表現活動は、オシムや野村のいう自信・独立心を伸ばす活動に他ならない。

つぎに「想像力や独立心を伸ばすための自由」について表現活動との関係をあきらかにしよう。

総合表現は、「型ハメ」を最もしてはいけないことと考えている。この場合、「型ハメ」とは、先生が見本を示して子どもにその通りにやらせることだ。たとえば、歩き方はこのように先生が歩いたとおりに歩きなさい。身体でポーズをとるときは、先生が見本をみせてその通りにやらせる。こういった指導は、表現活動にふさわしくないと考えている。

子どもには、取り組んでいる題材を何度も朗読したり、歌ったりして（教材解釈も含めて）、題材のイメージを子どもたちがめいめいに作り上げ、その結果、子どものなかからでてくる表現を期待し、先生はその表現をひきだしていってやる・・・型ハメとは正反対のことをしているのです。

つまり、子どもたちには「自由」に表現させているのです。もちろん、「自由」というのは、困難さもともない、子どもたちは自分の頭で考え、自分の身体で表現しなければいけない。このような活動を、本校では年間を通して取り組んでいるのです。

「まずは、自分でやってみる。こういう自己の意志力が重要なのだ。しかし、日本では子供の頃から他人に自らの進む道を依存する傾向が見られる。この時点で、すでにクリエイティビティを放棄し、誰かのコントロールに意志を委ねているのだ。ゆくゆくは、『自分はここまでいい』と自分に対しての限界を設定するような心理につながっていく。」（オシム）

総合表現活動は、子どもたちに「自分でやってみる」ことをうながす。自分の意志で表現させるのです。先

生には依存させない。だれかに見本を見せてもらって真似るのではない。自分で考え表現することを、鍛えていくのです。

「サッカーには限界という概念は存在しないはずである。満足してしまえば、それ以上の進化はなくなる。結局のところ、限界を設定するのは人間なのだ。」（オシム）

授業のことをすぐに思い浮かべた。サッカーを授業に変えてみよう。人間を教師に変えてみよう。「授業には限界という概念は存在しないはずである。満足してしまえば、それ以上の進化はなくなる。結局のところ、限界を設定するのは教師なのだ。」

授業が本質的な仕事である教師は、授業を進化させていかなければなりません。子どもたちはだれもが自分の成長を願っています。教師はそれにこたえていかなければなりません。教師は、子どもの成長に先回りして成長していかなければなりません。日々勉強です。

「選手（子ども）が優秀であればあるだけ、トレーナー（教師）も同じく、もしくは、それ以上に優秀でなければならない。多彩なアイデアと発想を持って働かなければいけないのである。」（　）内は筆者。まさにオシムの言うとおりである。

サッカーが人生であるオシムは次のようにも言っている。

「人々は、サッカーを自分のゲームとして受け入れなければならない。美しさを感じること、このゲームに近づくこと、もっと良く理解することーそれが、可能になったときにサッカーは劇的に進化する。」

「一般の人にＪリーグにもっと敬意を持ってもらえるかどうかは、選手のパフォーマンスと行動にかかっている。」

少々言葉をかえてみよう。

「人々は、授業を自分の問題として受け入れなければならない。授業に近づくこと、もっと良く理解することーそれが、可能になったときに教育は劇的に進化する。」

「人々に教育にもっと敬意を持ってもらえるかどうかは、教師の授業力にかかっている。」

いかがでしょうか。保護者のみなさんが授業の重要性を十分に理解したとき、先生たちは報われます。授業に集中していける合意が生み出されていくからです。授業力の乏しい先生たちは、今以上に叱咤激励を受けることにもなります。

教師のことや保護者の皆さんのことを話題にしたので、校長はどうなのか？　オシムはこのように言っています。

「日本であろうと、海外であろうと、クラブもしくは自国の代表チームであろうと、前進させるために最も重要なのは、その監督が何をしたいかである。その監督という地位で、何かを変化させようとしなければならないし、何かを動かさねばならないのだ。」

監督を校長に読み替えましょう。

校長はビジョンをもち、その実現のために具体的な計画を持ち実践しなければならないと言うことです。私は、「１０００のこどもに１０００の未来～すべての子どの可能性を開きのばす～」を教育ビジョンとし、日々の授業でこれを実現していく。日々の授業を、共同研究者を迎えいれて、授業研究を盛んにし、先生たちの授業力を向上させ、授業の質を高めていく。その結果、子供たちの可能性が開かれのびていく。

以上が、子どもの可能性を開きのばす（何かを変化させようとし)、教師を動かす（何かを動かさねばならない）ということです。

最後に、

「多くの国では、人々は、サッカーで呼吸しているのだ。しかし、日本ではサッカーは、それほどの役割をまだ持っているとは思えない。サッカーは人生と同じでなくてはならない。」

本校の共同研究者である川嶋環先生や西江重勝先生は、授業で呼吸しているように見える。お二人は、「授業は人生と同じ」ように見える。わたしたち学校のものも見習いたいものだ

（２０１０サッカーワールドカップを記念して･･･）